

上田万年の欧州留学に関する記録¹⁾

清水 康 行

はじめに

上田万年（1867-1937）が、「博言学²⁾ 修業」のため独仏に留学した1890～94年の間、具体的に何を学んできたのかについては、彼自身が多くを語っていない³⁾ こともあり、従来、余り明らかにされてこなかった。留学中の事績を知る拠り所となりそうなのは、上田の死後、弟子の新村出（1876-1967）が編んだ『上田万年先生年譜』⁴⁾（以下、『年譜』）中の記事（1974翻刻、pp.251-253）くらいであった⁵⁾。だが、この記事の根拠と狙いは不明で、掲げられた学者名にしても、彼等に上田が学んだ《事実》を伝えるものなのか、或いは、単に当時の教授陣を並べ、上田が接した《可能性》を示すだけのものなのかは、確かでなかった。

ところが、上田の留学先となったベルリン大学（当時Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin、現Humboldt-Universität zu Berlin、以下UB）とライプツヒ大学（Universität Leipzig、以下UL）それぞれの大学アルヒーフ（Universitätsarchiv、以下、前者UAB、後者UAL）には、当時の諸記録が保存されており、それらによって、双方における在学期間、住所、就中、後者では受講した講義名・教授名まで知ることができる。

本編は、これらの記録内容、および、それに関連する諸資料を紹介するものである⁶⁾。

1. 出国

文部省から上田に留学命令があったのは1890年9月9日である。同年度の『文部省第十八年報』（宣文堂書店、1967復刻）は、前後の年度と異なり、個々の留学生について具体的な情報を示しており、「海外留学生」（p.10）中に、以下の記事を掲げる。

九月九日醫科大學助教授醫學士坪井次郎ヲ衛生學修業文學士上田万年ヲ博言學修業トシテ獨
國ニ理學士平山信ヲ星學修業トシテ英國ニ各三箇年間留學ヲ命ス

名の表記が「万年」とある。ただし、同年9月12日付『官報』2163（龍溪書舎、1985復刻）に載る同趣の記事（p.153：発令日示さず）の方では、通例の「萬年」となっている。

『記録帳』(B1)は、各学生がUBに学生登録した日に記すもので、もっとも基本的な台帳となる。左端の通し番号は事務局が書いたものだが、次の学生氏名は、それぞれ筆跡が異なり、各学生の自署だろう(他の列には同一人(事務官)の手と思われるものも混在する)。

上田の名は、(UB創設より)81年度(1890/91)の1891年4月17日分に見える。渡欧から約半年後に学生登録したこととなる。

1列目の2395は当該年度のNo〈(通し)番号〉である。

2列目はVor und Zunamen der Studirenden〈学生の氏名〉。*Mannen Ueda*と署名されている。上述の通り、上田の自署であろう。

3列目はGeburtsort und vaterländische Provinz〈出生地と出身国〉。*Tokio Japan*とある。

4列目はStudium〈専攻〉。*philos.*〈哲学〉である。

5列目はStand der Eltern〈両親の職業〉。*Privatier*〈無職(利子生活者)〉とある。ただし、旧名古屋藩士であった父は、上田が幼少の間に亡くなっている。

6列目はOb und von welcher Universität Sie gekommen sind〈既卒の大学〉。空欄である。

7列目はAbgang〈卒業〉。当然、卒業時に書き加えられるものであり、*rite abg. 10/8 91*〈1891年8月10日に正規卒業〉とある。なお、ドイツの大学では、所定の在学年数や単位取得によって学士号を得て《卒業》するという制度は無く、その時点で学籍を離れたことを意味するのみである。上田は、この日、1学期間の在籍のみでUBを去ったこととなる。ただし、当時の(近年でも)ドイツでは、短期間で大学を移ることは珍しくなかった¹³⁾。

なお、同帳には、上田を挟み、*Kunitaro Okada* (2394、医)¹⁴⁾と*Ichizo Yoschii* (2396、法)¹⁵⁾という日本人が記名している。おそらく、上田は、彼等と連れ立って学生登録に赴いたのだろう。ちなみに、両者とも、『年譜』には見えない名である。

2-2. 『職員・学生目録』—ベルリンでの住所—

UBでは、毎学期、教職員・学生の専攻・住所等が一覧できる『職員・学生名簿』(B2)を出している。上田の名は、1891年夏学期「学生名簿」Uの部の最初(p.132)に見える。

左から5列は、Namen der Studirenden〈学生の氏名〉、Ostern〈復活祭(夏学期)〉、Michaelis〈ミカエル祭(冬学期)〉(一方に入学年が記される)、Geburtsort oder Vaterland〈出生地または出身国〉、Studium〈専攻〉を示し、B1を出す情報は含まない。

6列目からは、Postbezirk〈郵便地区〉、Hausnummer〈番地〉、Namen der Straßen〈通りの名〉の順で、Wohnung〈住所〉が知られる。Artillerie[straße]は旧名、現在はTucholskystr.と呼ばれる通りである。Unter den LindenのUB本部(哲学部も大学創設時から構内にある)と国立図書館(旧館)の間を北に入るUniversitätsstr.から、Geschwister-Scholl-Str.を経て、Spree川に架かる橋を渡ると、この通りになる。4dがどこであったか未詳だが、現在の番地から推すと、橋を渡って直ぐの辺と思われる。

同じB2のp.73に、Hitaka, Masane (88冬、哲)¹⁶⁾という日本人学生が、同じく4d Artillerieを住所とするのが見える。上田は、彼を頼って、ここに住んだのだろうか。ただし、同居ではなく、同じ建物の別の部屋を借りたのかも知れない。

B2 : *Amtliches Verzeichniss des Personals und der Studirenden der Königlichen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin. Auf das Sommerhalbjahr vom 16. April bis 15. August 1891.* 〈『ベルリン王立フリードリッヒ・ヴィルヘルム大学職員・学生公式名簿 1891年4月16日～8月15日の夏季半年分』〉

Namen der Studirenden.	Df.tern. Michaels.	Geburtsort oder Vaterland.	Stu- dium.	Wohnung.		
				Postbezirt.	Hausnummer.	Namen der Straßen.
II. Heba, Mannen	91—	Japan	Philosf.	N	4d	Artillerie

2-3. 『講義目録』—受講した可能性のある講義—

UBで上田が受講した講義を具体的に知らせる資料は見出せていない¹⁷⁾が、『講義目録』(*Index Lectionum*) 所載の講義群から、受講した可能性のあるものを探ることはできる。

上田に最も影響を与えたと思われるガーベレンツ (Georg von der Gabelentz, 1840-1893)¹⁸⁾ は、この学期、以下の科目を開いている。

I. Publice linguam malaicam docebit d. Merc. h. V-VI

II. Privativim 1) linguae iaponicae classicae grammaticam docebit d. Mart. et Ven. h. IV-V;

2) textus sinicos e libro Kù-wên-p'ing-cù depromptos interpretabitur d. Merc. h. IV-V.

III. Privatissime et gratis exercitationes linguisticas moderabitur dieb. et hor. defin.

〈I. 公開:マレー語講義、水曜5-6時／II. 私的:1) 日本語古典文法講義、火・金4-5時。

2) 中国語原典講読、水4-5時／III. 個人的・無料:言語学演習指導、日時指定〉

特に興味深いのは、日本語古典文法を取り上げていることである。上田の論文「言語学者としての新井白石」(『史学雑誌』6-2, 3, 1895:『国語のため』、博文館、1895)の冒頭に引かれたガーベレンツの言葉¹⁹⁾は、或いは、この講義でも語られたのかも知れない。

他に、『年譜』に載るH. Steinthal²⁰⁾は神話学、J. Schmidtはギリシャ語とゴート語、W. Grubeはモンゴル語と中国語、E. Schmidtはドイツ文学史、G. Schmollerは経済学を講じている。

3. ライプツヒ

3-1. 「学生証」—ULでの基本情報—

「学生証」(L1)は、学生ごとに、見開き2頁を用い、基本的な情報を記したものである。注目すべき記述が多い。記載順に述べよう。

Namen 〈氏名〉。姓－名の順で、間にカンマを挟んで示す。姓を、UBと異なり、*Uëda*と記してある。当文書の記入者は大学の事務担当者だろうが、上田の自署と思われる後述L2の署名でも、同様に、*Uëda*という、通例のドイツ語表記では用いない*ë*の表記が見られる。これについては、次節で改めて取り上げる。名は、やはり*Mannen*である。

Geburtsort 〈出生地〉は*Tokio*、Staatsangehörigkeit 〈国籍〉は*Japan*である。

Geburtstag 〈誕生日〉は1867年2月12日。旧暦1月7日（『年譜』、p.244）を太陽暦に置き換えてある。なお、同行末の24と大きく書かれた数字の意味するところは不明。

Reifezeugnis 〈中等教育卒業証明〉は、§19とある。ドイツ国外の学校卒の類別記号か。

Inscribiert 〈学生登録〉は、1891年10月15日である。UBを去ったのが同年8月だから、夏休みを挟み、すぐにULに移ったこととなろう²¹⁾。No. 1201は学籍登録番号。

L1: Quästur-Karte 〈「会計課－学生証」〉

D. S. 1891		1891 10 15	
Namen: <i>Uëda, Mannen</i>			
Geburtsort: <i>Tokio</i>			
Staatsangehörigkeit: a) <i>Sachsen.</i>			
Geburtstag: <i>12. Februar</i> 18 <i>67.</i>			
Reifezeugnis: <i>5. Gymn.</i> Reifeh. <i>S. T. M.</i>			
Inscribiert am <i>15. Oct.</i> 18 <i>91.</i> Nr. <i>1201.</i>			
„ anderweit. <i>15.</i> 18			
Studium a) <i>philos.</i>			
„ b)			
Karten-No. <i>4342, 3049, 2951.</i>			
a) <i>3. Gymn. ph. Phil.</i>			
b)			
Wohnungen:			
c)			
d)			
e)			
f)			
g)			
b) <i>Japan.</i>			
Stand d. Vaters: <i>Privatier.</i>			
Religion: <i>Luth.</i>			
Früher besuchte:			
Universitäten:			
Beurlaubt:			
Strafen Datum:			
Abgangszeugnis ausgestellt am <i>18. Sept.</i> 18 <i>93.</i>			
Studiert fort bis <i>18.</i> 18			
Abgegangen am <i>12. Aug.</i> 18 <i>93.</i>			

次行の“anderweit 〈他の時に：再登録のための欄か〉は、空欄。行末の数字4は不明。

Studium 〈専攻〉はPhilosophie 〈哲学〉。なお、ULのPhilosophische Fakultät 〈哲学部〉の専攻には、Philosophieと並び、Philologie 〈言語学〉もあり、上田が受講した講義の大部分は後者に属する。具体的な受講科目については、3－3で述べる。

Karten-No. 〈カード番号〉4342, 3049, 2951は、未詳。

Wohnungen 〈住所〉は、*Haydnstr.* 3番地*Schröder*方とある。*Haydnstraße*は、市内南西部、現大学図書館が建つ*Beethovenstr.*の2本南（*Beethoven-*, *Mozart-*, *Haydn-*の順）を走る短い通りである。3番地は*Grassistr.*と交差する角に当たる。

Stand d. Vaters 〈父の職業〉は*Privatm* 〈無職：B1でのPrivatierと同意〉。

Religion〈宗教〉は*Prot.*〈新教徒〉とあるが、上田がクリスチャンだったとは思えない。

Früher besuchte Universitäten〈以前に通学した大学〉は、空欄である。UBに関する記述がないのは気になる。前述の宗教とこの大学歴の問題については、編末の付章で検討する。

Beurlaubt〈休学〉とStrafen Datum〈処罰日〉は、空欄。

Abgangszeugnis ausgestellt〈卒業証書作成〉(証書の発行・受領日)が1893年9月18日、Abgegangen〈卒業〉(最終学期の終了日)が1893年8月12日、それぞれ公的な日付が確認される。なお、間のStudiert fort〈(卒業)以後の在籍期間〉は、空欄である。

3-2.『証書授与記録』—上田の署名—

『証書授与記録』(L2)は、卒業(修了)証書を授与された学生について、受領日の順に記録したもので、半年ごとに一冊に綴じられている。1枚に2名程度の学生に関する情報が、次節の「受講証明目録」(L3)と左右見開きとなって示される。上田についての記録は、1893年下半期分に収められている。内容そのものは、ほぼL1の情報を出るものではない。

L2: *Protokoll über den Studirenden erteile[n] Studien und Sittenzeugnisse am 1 Juli bis 31 Dezember 1893* 〈『1893年7月1日～12月31日分、学業・行状証明書授与学生記録』〉

No.	Name des Studirenden, Geburtsort, Inscriptionstag und Studium.	Tag der Ausstellung des Sittenzeugnisses.	Ob die Studien noch weiter fortgesetzt werden und wie lange?	Tag der Aushändigung des Sittenzeugnisses und Quittung.	Ob die Aufnahme in die Liste der Abgegangenen erfolgt ist.
431.	<i>Ueda,</i> <i>Mannu</i> <i>S.</i> <i>Tokio</i> <i>d. 15. Oct</i> <i>1891.</i> <i>Philosophie.</i>	<i>18. Sept</i> <i>1893</i>	<i>Nein.</i>	<i>Erhalten</i> <i>d. 18. Sept 93</i> <i>Ueda Mannu</i>	

1列目のNo.〈番号〉は、冊子ごとの通し番号で、次掲L3の番号と対応している。

2列目はName des Studirenden, Geburtsort, Inscriptionstag und Studium.〈学生の氏名、出生地、学生登録日と専攻〉。最初の下線付きで姓を示し、カンマを付して、下に名を示している。それ以下の内容はL1と同じである。

3列目はTag der Ausstellung des Sittenzeugnisses. 〈証書交付日〉。これもL1と同じ日付。下の方に、L1と同日の卒業日が、上とは別筆で、書かれている。

4列目は、Ob die Studien noch weiter fortgesetzt werden und wie lange? 〈更に研究を続けるか? その期間は?〉に対して、*Nein* 〈否〉とある。ただし、これは、ULでの研究継続の意志を問われたもので、今後の研究活動全般を放棄する意ではない²²⁾。

5列目はTag der Aushändigung des Sittenzeugnisses und Quittung. 〈証書引き渡し日と受領証〉。3列目と同日に受領した旨の日付と、上田の署名がある。

注目されるのは、この署名である。明らかに他と異なる筆跡であるところから、上田が自署したものと思われるが、L1と同様のëを用いた綴りで、姓一名の順、しかもL1や本記録の2列目と異なり、姓と名の間にカンマを挟まず、*Uëda Mannen*と記されている。

ëは、ドイツ語では一般に用いない表記法で、ドイツ語流のウムラウトではなく、フランス語等で用いるトレマと思われる。おそらく、上田は、eにトレマを付すことで、Uとeを別々の母音を示すものとし、ウエダと読ませようとしたのであろう²³⁾。

姓・名の順に関しては、ドイツでも、名簿等の場合に、姓を先に記すことはあるが、その場合は、姓と名の間に、を打つのが通例である。ULの諸文書でも、事務官等が記したと思われるものでは、いずれも、*Uëda, Mannen*と、間にカンマが挟まっている。

一方、署名の場合、ドイツでは、姓・名の順で書くことは、まず考えられない。L2の半年分に記された署名中、姓名の順だと確認できるのは、上田の例のみである。

ëの使用といい、カンマを挟まない姓名順の表記といい、この署名には、若き上田の強い自己主張が感ぜられよう。

3-3. 「受講証明目録」—上田が受講した科目名・教授名—

次に掲げるのは、上田が受講した科目名・教授名が記された「受講証明目録」(L3)である。UL在学中、上田が何を学んだかを窺わせる、極めて興味深い資料である²⁴⁾。

各学期の『講義一覧』(*Verzeichniss der im···Halbjahre···auf der Universität Leipzig zu Haltenden Vorlesungen. 1891/92, 1892, 1892/93, 1893*)に従い、講義名の略記([]内)を補い、所属専攻、授業日、教授名を示す。各教授については、『職員目録』(*Personal-Verzeichniß Universität Leipzig für das···=Semester···*)等に基づき、若干の補足説明も付ける²⁵⁾。

なお、『講義一覧』は、「系統的」(A. Systematische Uebersicht der Vorlesungen)と「教員別」(B. Uebersicht der Vorlesungen nach der Ordnung der Lehrer in den Facultäten)の二部構成となっており、前者は、学部・専攻別(更に下位分類する場合もあり)に細かく分けて、講義名を列挙する。哲学部では、A. Philosophie 〈哲学〉、B. Philologie 〈言語学〉²⁶⁾、C. Geschichte (einschliesslich Culturgeschichte) und Geographie 〈歴史(文化史を含む)および地理学〉等に大別され、言語学分野は、更に、a) Altclassische Philologie 〈古典語学〉、b) Orientalische Philologie 〈東洋語学〉等に下位分類されている。一方、後者では、学部別に、称号別に列挙された教授ごとに担当講義名(前者との間に多少の不一致が見られる場合もある)を並べ、専攻分野別の区分けはない。以下の講義名の補記は、専ら前者に拠る。

Verzeichniss der als gehört bescheinigten Vorlesungen.	
431.	<p><i>Auf Grund d. Quästuliste.</i></p> <p>1891/92: Interpretation von Stenzler's Sanskrit- Chrestomathie, P. V. Windisch. Grammatik d. modernen russ. Sprache, P. V. Scholvin.</p> <p><i>Auf Grund d. Quästuliste.</i></p> <p>1892: Sanskrit-Grammatik f. Anfänger, P. V. Windisch.</p> <p>1892/93: Elemente d. Sprachwissenschaft, P. V. Brugmann.</p> <p>1893: Phonetik, P. V. Sievers.</p> <p><i>Auf Grund d. Quästuliste:</i></p> <p>Einleitung in das Studium d. Geographie, P. V. Kappeler.</p>

1891/92年冬学期、*Interpretation von Stenzler's Sanskrit-Chrestomathie [für Anfänger]* 〈初学者向けシュテンツラー編サンスクリット名文集の解釈〉、言語学分野のOrientalische Philologie 〈東洋語学〉、月曜と木曜の午後4～5時。担当教授Windisch (Ernest, 1844-1918) は、Professor des Sanskrit 〈サンスクリットの正教授〉、少壮文法学派の一員。

同学期、*Grammatik d[er] moderne[n] russ[ischen] Sprache [(für Anfänger)]* 〈現代ロシア語文法 (初学者向け)〉、言語学分野のNeuere Philologie 〈近代語学〉、月・火・木・金の午後5～6時。Scholvin (Robert, 1850-1929) は、Außerordentlicher Professor 〈員外教授〉である。

1892年夏学期、Windisch の*Sanskrit-Grammatik [für] Anfänger* 〈初学者向けサンスクリット文法〉、東洋語学、月・火・木・金の午後3～4時。上田が同じ教授の授業 (科目名は異なる) を連続して受講したのは、このWindischのみである。

1892/93年冬学期、*Elemente [der] Sprachwissenschaft [ft, besonders für classische Philologen, Germanisten und Romanisten]* 〈言語学入門、特に古典語学・ゲルマン学・ロマンス学専攻者向け〉、月・火・金の午後5～6時。言語学分野の先頭に掲げられており、同専攻学生への概論的な性格の講義と思われる。Brugmann (Friedrich Karl, 1849-1919) は、Professor der indogermanischen Sprachwissenschaft 〈インドゲルマン (印欧語) 言語学の正教授〉、いうまでもなく少壮文法学派の中心人物である。

1893年夏学期、*[Grundzüge der] Phonetik* 〈音声学の基礎〉、言語学分野のDeutsche Philologie 〈ドイツ語学〉、水・土の午前10～11時。Sievers (Eduard, 1850-1932) は、Professor der deutschen Sprache und Literatur 〈ドイツ語と文学の正教授〉で、Director des fgl. deutschen Seminars 〈ド

イツ語ゼミナール主任)。音声学研究で名高く、少壮文法学派を代表する一人。なお、Phonetik と題する講義を開くのは、1892年のUL教授就任以来、本学期が最初である（1892はDeutsche Grammatik、1892/93はDeutsche Metrik）。彼は、この時期、主著*Grundzüge der Phonetik*（『音声学基礎論』：*Grundzüge der Lautphysiologie*（『音声生理学基礎論』）（1876）を1881²より改題）の新版（1893⁴）を出している²⁷⁾。

同学期、*Einleit[un]g in da[s] Studium d[er] Geographie*（『地理学調査入門』）、地理学分野（更なる細分はない）、月・火・木・金の午後4～5時。*Ratzel*（Friedrich, 1844-1904）は、Professor der Geographie（『地理学の正教授』）で、Director des geographischen Seminars（『地理学ゼミナール主任』）。人類地理学の祖として知られる彼の講義は、上田が言語学分野以外で受講した唯一の科目となる²⁸⁾。

少壮文法学派嫡流を名乗れそうな壮観だが、「初学者向け」「入門」「基礎」と冠した科目ばかりである。当時の上田の学力が、そうした入門講座以上には及ばなかったかと思われるが、基礎的な科目に参加するように心掛けたと取ることもできようか。

これらの科目の具体的な内容を示す資料は未見だが、この時期に、上田がブルクマンやジーフェルスといった気鋭の言語学者から直接に教えを受けていたことは、十分に注目に値しよう。特に、ジーフェルスの最新の音声学研究に接したであろうこと、ラッツェルの地理学を進んで受講していることは、帰国後の上田の言説を考えると、興味深い。

なお、上述のジーフェルスやラッツェルがそうであるように、『職員目録』には、教授の称号とは別に、ゼミナール主任の肩書が示される（各ゼミ担当者には主任以外の者もある）。『講義一覧』でも、ゼミは、しばしばKönigliches（王立）と冠され、他の講義群とは分けて示されており（そうでないものもある）、一般の講義とは異なる位置付けと評価を与えられていたことを窺わせる。しかし、同じ時期の他の学生の受講証明には…Seminarや…Proseminarという科目が散見されるのに対し、上田のには記されていないので、彼は、こうしたゼミに加わる機会を得なかったと考えられる²⁹⁾。これについては、次節で、改めて取り上げる。

3-4. 上田の受講科目数—他学生との比較—

L3に示された、2年間（4学期）で合計6科目、学期当たり1～2科目という受講科目数（ただし時間数でいうと週に3～6時間）は、かなり少ない印象を与える。

試みに、上田と同じL2・L3の冊子に載る哲学専攻と言語学専攻の学生（1893年7月～12月修了：上田を含む72名）について、その在学期間と受講科目数を調べると、以下の通りとなる。

上田の在学期間は平均的といえるが、受講科目数は、合計・学期当たりとも、平均の半分にも満たない。やはり、他の学生と比しても、相当に少ないものだったと確認できる。

在学期間（学期数）	最長 = 16	最短 = 1	平均 = 3.9
受講科目数（合計）	最多 = 75	最少 = 0	平均 = 16.1
（学期当たり）	最多 = 10	最少 = 0	平均 = 4.2

より具体的な比較のために、上田と同じ在学期間となる1891/92冬学期入学～1893夏学期修了

の、哲学（略号：哲）または言語学（言）専攻の学生9名（上田を含む）の受講状況をみると、以下の表ようになる。左端の数字はL2・L3に付された番号、生年は『職員目録』中の「学生一覧」で補い、科目分野は『講義一覧』の分類に従う。ゼミナールかプロゼミナールの受講記事がある学生は「ゼミ等」欄に注した³⁰⁾。

No.	氏名	生 年	出身等	専 攻	受講科目数					科目分野			ゼミ等
					91 冬	92 夏	92 冬	93 夏	合 計	哲	言	他	
37	Gruber, Eduard	1861		哲	3	5	2	2	12	6	0	6	3×医学部
60	Abegg, Richard	1869	Dr. phil	哲	3	3	1	0	7	0	0	9	
79	Schmitz, Jacob	1868		哲	2	5	5	5	17	0	0	17	
327	Grundmann, Richard	1870		言	10	7	5	3	25	7	11	7	2×ゼミ
404	Sengbusch, Woldemar	1869	Moskau	哲	7	2	5	5	19	2	12	5	3×プロ
431	Ueda Mannen	1867	Tokio	哲	2	1	1	2	6	0	5	1	
652	Höhne, Friedrich	1871		哲	4	5	5	8	22	1	14	7	10×ゼミ
660	Kleinhans, Edmund	1870	Meran ³¹⁾	哲	7	6	6	5	24	0	24	0	
675	Pottebaum, Louis	1866		言	1	1	1	1	4	0	2	2	

既に学位を有する60番、以前に在学経験のある675番を除くと、いずれも、上田より遥かに多く受講している。留学生と思われる404番・660番（氏名から推すと、共にドイツ系か）でも3倍以上となっている。上田の受講科目数の少なさが、改めて確認される。

ゼミに関しては、必ずしも多くの学生が登録した訳ではないが、上掲の通り、複数の学生が受講登録しているのが確認できるので、上田は、やはり、ゼミ参加の機会を得なかったと理解するべきだろう。

ちなみに、彼らが参加したゼミを挙げると、327番（言）は91冬（Birch-Hirschfeld担当）のロマンス語ゼミと93夏（Heinze）の哲学ゼミ、404番（哲）は91冬（Buresch）と92冬・93夏（共にImmisch）の言語学プロゼミ、652番（哲）は、91冬・92夏（共にBahder）と92夏・93夏（共にSievers）のドイツ語、91冬・92夏・92冬・92夏（全てBirch-Hirschfeld）のロマンス語、92冬・93夏（共にLamprecht）の歴史学、合計10ゼミを受講している。

なお、上田は、「博言学修業」のために留学したはずなのに、言語学ではなく哲学専攻として学生登録をした上で、哲学分野科目は全く取らず、言語学分野を主に受講しており、些か不審である。しかし、上掲表から、当時のULでは、そうした登録専攻と主要受講科目分野とがずれること自体は、そう奇異なことではなかったことが知られる。

表に示した者の中でも、いずれも哲学専攻ながら、660番の受講科目は全て言語学分野、言語学・歴史学のゼミに数多く参加した652番も殆どが両分野のみ、60番と79番は専ら数学・自然科学（これらも哲学部に属する）のみ、という極端な例が見られた。さらに、1例だけだが、他学部の授業（医学部3科目）を取った者（37番）もあった。

4. パリ

パリ時代の上田の消息を伝える記録類は、未発見である。

『年譜』 p.253には「Michel Bréal (62) (1832-1915) / Antoine Meillet (28) (1866-[1936]) 高等学院」とあるが、両者が属するÉcole pratique des Hautes Études〈高等研究院：以下、EPHE〉のSection des sciences historiques et philologiques〈歴史・言語学部門〉の*Annuaire 1895*〈『1895年報』〉に載る“Liste des élèves et des auditeurs réguliers pendant l'année scolaire 1893-1894”〈「1893-1894年度の学生・聴講生一覧」〉に上田の名はない。同部門とSection des sciences religieuses〈宗教学部門：日本学者Léon Rosnyが属する〉の学生台帳にも見当たらない。

ちなみに、『年報』で、1893/94年度の授業内容を見ると、Bréalは休講だが、Meilletの古スラブ語形態論と比較文法、L. Duvauのギリシャ・ラテン語と古ノリス語、P. Passyの歴史音声学と一般音声学、J. Gilliéronのフランス語方言学などが開講されている³²⁾。(もぐりで聴いたことまで否定できないものの) 上田がこれらに参加したとは考え難からう。

5. 帰国

上田が帰国した時期について、『年譜』 p.253では1894年「6月帰朝」とする。7月5日には文科大学教授に就任している(『官報』 3305、p.74) から、6月中なのは確かであろう³³⁾。

6月9日付*The Japan Weekly Mail* “LATEST SHIPPING. / ARRIVALS.”に、出国時に利用した仏船Saghalienが、4月29日にマルセイユを発ち、6月8日に横浜に着いたとあり、これに乗っていた可能性が高いが、“PASSENGERS. / ARRIVED.”に、上田の名は見えない。

6. 新村『年譜』の信頼性

既述の通り、上田のULでの受講証明(L3)に記された教授陣は、Windisch、Scholvin、Brugmann、Sievers、Ratzelの5名である。このうち、Scholvin以外の4名は新村『年譜』に見える。一方、『年譜』には、A. Leskien、W. Wundt、K. Lamprechtの名も挙げられる。この時期、彼等もULで講じていたことは『講義一覧』で確認できるが、L3にはない。

『年譜』は、(何かの折に彼等にも師事する機会を得たかは不明ながら) 上田が受講した《事実》に基づくものではないということができよう。ただし、『年譜』が、言語学以外で唯一受講した地理学者Ratzelの名を挙げてあり、しかも彼が『年譜』所掲のUL教授陣中唯一の言語学者以外の人物であることから、新村は、上田がRatzelを受講したことを、何らかのかたちで確かめ得たのかも知れないと考えることもできよう。

UBでは、L3に相当する記録が見出せていないので、『年譜』に記されたGabelentz、Steinthal、J. Schmidt、Grube、E. Schmidt、Schmoller等の講義を取ったか否かを確認することはできない。しかし、ULでの受講数から推しても、僅か1学期の在籍期間に、彼等の全てを聴いたとは考え難い。こちらを受講の《事実》に基づく記事ではなかろう。一方で、ULと同じく、経済学の

Schmollerの名がわざわざ掲げられているのには、何らかの根拠があったかとも考えられよう。

パリについては、既述の通り、『年譜』が記すBréal、Meilletの属するEPHEに上田は在籍していない。これも《事実》に基づく記事ではないのだろう。ただし、ここでは逆に、EPHEで言語地理学を講じていたGillieronの名が『年譜』に現れないのが気にかかる。この点に関する調査と考察は後日を期したい。

付. ライプツヒで学んだ日本人—UALのサイトから—

UALは、2010年に、市中心部から南東に少し離れたOststraßeから、大学本部から歩いて数分のPrager Straßeに移転した。それと前後して、ホームページを一新し、大学図書館とも協力して、所蔵資料の画像データや関連情報の公開を、積極的に行っている。

その一環として、UALのスタッフによる調査報告を幾つかネット公開しているが、その中の“Japaner in Leipzig”というページで、1870年代から1930年代にかけてULで学んだ日本人127名に関する諸情報を掲げている³⁴⁾。上田（Mannon Uedaと誤記されている）の名もある他、平山信や藤岡勝二といった上田所縁の人物名も見える³⁵⁾。

3-1で紹介した「学生証」(L1)を主資料に、各人の氏名・生年月日・出身地・宗教・父（職業）・住所・高等学校卒業・以前の大学・学籍登録（入学）日・学籍番号・除籍（卒業）日・証書授与日・専攻・注・更なる典拠資料・参考文献を列挙している。藤岡など数名については、L1の画像（藤岡の場合は、最初の入学時と翌年の再登録時の2様）も示されている。

これらの情報を手掛かりに、3-1で疑いを残した事項について、再検討をしておこう。

上田のL1では、宗教を*Prot.*（新教）とする。当ページの示すところでは、127名中、Bud., budd等、仏教徒が最多の76名で、神道が3名、儒教が1名、土着宗教（heimatische）が1名あるが、ev., Prot., protest等、17名がキリスト教徒としている。なお、空欄等、不明・無宗教が30名ある。

日本人留学生全体の2割弱がキリスト教徒なのは考え得る分布ともいえようが、そのうち半数以上、上田を含む9名が1888～92年に集中している。大学側の記述態度の変化や政策上の動きがあったかとも思われ、読者諸賢の御教示を願うところである。

また、既往大学歴については、上田を含む53名を除く、74名に何らかの情報が示されている。うち、17名（単記12名、他と並べて記す者5名）がBerlin（UBだと思われる）を挙げている。Tokio（東京帝大だろう）を挙げるのも18名（単記11名、他と並記7名）ある。ちなみに、KiotoまたはKyoto（共に京都帝大か）とするのは10名（単記8名、他と並記2名）である。

上田のにも、BerlinなりTokioなりとあってもよさそうだが、既述の通り、何も記されていない。ただし、大学歴の記述の有無には、年度により、明らかな偏りがある。上田と同学期、1891年冬学期入学の3名（上田を含む）では、誰にも大学歴が示されていない。同様に、1888年夏・冬入学の9名、1897年夏・冬の3名にも、記述が無い。一方、上田入学年度を挟む1890年冬と1892年夏～1896年冬入学者では、計13人中12名に記述がある、といった具合である。上田の記録に大学歴が記載されていないのは、本人の責任ではなく、折々の文書作成事務姿勢の揺れによるのかも知れない。少なくとも、その記述が無くても、直ちに、上田が申告を怠ったとか、UBの在籍証明を得なかったとか、彼の不名誉に結びつく即断をすべきではなからう。

[付記・謝辞]

本編は、もう10年以上も前となる国語学会平成11年度春季大会（1999年5月30日、同志社大学）において、筆者が同じ題名で行った研究発表の要旨集原稿に、その後の調査成果等を織り込み、手を加えたものである。学会発表時の誤読・誤解を訂正した部分もある。

（なお、上掲発表の後、「『国語学』は始まったのか？—上田万年の欧州留学から国語研究室創設まで—」（第21回多言語社会研究会、2003年1月2日、日仏会館）と「『国語学』と『言語学』の間—上田万年と彼の学生達を軸に—」（国語学研究室特別講演、2007年7月14日、東北大学）で、本編の内容を含む発表を行っている。また、筆者執筆「15 博言学・国語学・文学」（野山嘉正（編著）『言語文化研究Ⅰ—国語国文学の近代—』、放送大学教育振興会、2002年）で、本編内容の一部に触れたこともある（p.201以下）。同「上田万年のローマ字署名」（*Rômazi no Nippon*, 658, 2011）でも、本編の一部と同趣の論述をしている。）

国語学会での発表後、些かの追加調査を進めつつも、論文に纏めないままにいたところ、本編で取り上げたものとかかなり重なる資料を用いた金子亨氏による論文（注6参照）があるのを知り（同論文によると、金子氏は、1999–2000年、ULに客員教授として招かれた折に、これらの資料群を閲したようである：同論文に上掲発表への言及は無いが、他分野学会での口頭発表・要旨集に注意が及ばないのは無理からぬことであろう）、論文の執筆は、一旦、断念した。しかし、安田敏朗氏の近著、上田万年著・安田敏朗校注『国語のため』（平凡社、2011）で、筆者の発表の内容が取り上げられていた（p.486f：安田氏は以前から同発表に注目してくれていた）ことが契機となり、当報告には金子論文とは重ならない情報を含んでおり、論文として公表することに一定の意味もあろうかと思い直し、主にULに関する追加確認調査を行った上で、本編を成すこととした次第である。なお、以上の経緯もあるので、本編発表に際しては金子氏に御挨拶をと思っていたところ、2011年9月、筆者がUALを久方ぶりに訪れた数日後に、氏の訃報に接することとなり、それは叶わぬまになった。御冥福をお祈り申し上げる。

さて、本編の中心的な資料は、学会発表の前年に、筆者が送った照会FAX（ほんの10年余り年前なのに、FAX連絡とは、隔世の感がある：現在では、これらの資料群の一部に関しては、両大学のサイト、<http://edoc.hu-berlin.de/>と<http://ubimg.ub.uni-leipzig.de/>で、画像として見ることが出来る）に応じて、ほぼ一週間後（おそらく即日処理）に、UABとUALから郵送されてきたもの（原資料からの電子複写）で、その後、両地に複数回赴き、確認と追加調査を行ったものである。本編に掲げた画像は、全て、そうした機会に、UABとUALそれぞれから提供いただいた所蔵資料の電子複写またはスキャンデータに基づくものである。

調査に当たっては、Dr. W. Schultze館長はじめUABの方々、Dr. G. Wiemers前館長とDr. J. Blecher現館長はじめUALの方々と、UBのProf. Dr. V. Gerhardtの御世話になった。中でも、Dr. SchultzeとDr. Blecherには多くのことを教えていただいた。また、最近の調査の際には、UALのR. Lämmel氏に大いに助けていただいた。関連調査については、O. Dousset主任司書とP. Gallou氏はじめEPHEの方々、国立国会図書館、東京ドイツ文化センター図書館、学習院大学図書館、鶴見大学図書館、日本女子大学図書館の方々の御世話になった。また、筆記体を含む独文の読解

は筆者の手に負えない部分が多く、UAB・UALの方々と、シュテファン・カイザー、西山力也、黒子康弘の各氏に教えていただいた。特に、黒子氏には筆者の原稿での誤写を丁寧に指摘いただいた。さらに、浅野三平、釘貫亨、篠崎晃一、鈴木広光、橋本研一、古田東朔、松森晶子、村木新次郎、安田敏朗、谷中信一の各氏には、関連調査や研究発表内容に関し、貴重なコメントや教示を頂戴した。なお、本調査は、P. Villani（注22文献）で、UBとULにソシールの学生時代の記録があることを知り、それに示唆を受けて試みたものである。これらの方々に深謝申し上げる。

注

- 1) 本編成稿までの経緯については、本編末の〔付記・謝辞〕を参照されたい。
- 2) 「博言学」は言語学の旧称。1886年、東京帝大に「博言学科」が開設され、B. H. チャンブレンが初代教師となり、和文学科の学生であった上田らを教える。上田は、卒業後の1891年、文部省より「博言学修業」のための留学を命ぜられ、帰国後、東京帝大教授となり、「博言学講座」を担当する。彼は、論文「言語学の名称に就きて」（『国家教育』51、1896）で、博言学が言語学の名称として不適当であると主張し、1900年、講座名を「言語学講座」に改称する。
- 3) 上田万年「文学博士上田万年君」（『中学世界』14-15、1911）に回想があるくらいである。
- 4) 上田が逝去した1937年に起稿、1956年頃まで補筆された。新村出筆録・古田東朔校訂『上田万年 国語学史 附 新村出編『上田万年先生年譜』』（教育出版、1974）に翻刻、古田による「解説」も付す。
- 5) 柴田武「序文」（新村出筆録・柴田武校訂『上田万年 言語学』、教育出版、1970）pp.(2) 以下では、『年譜』にある学者達に上田が学んだとし、「これらの学者の著作と上田言語学の講義ノートを比べて、後者がどこから情報を得ているか調べて」いる。山本正秀「上田万年博士と言文一致」（『近代語研究』5、1977）p.631にも、『年譜』に従った記述が見られる。上田の留学時代に言及した他の諸研究も（直接にか、柴田・山本を通してか）専ら『年譜』に拠って展開されてきた。なお、注6も参照。
- 6) 本編で述べる記録類と重なる資料群を用い、当時の日本人ドイツ留学生を網羅的に調査したものに、Michael Rauck *Japanese in the German Language and Cultural Area, 1865-1914.- A General Survey*.（東京都立大学経済学会研究叢書2、東京都立大学経済学部、1994）と森川潤『明治期のドイツ留学生—ドイツ大学日本人学籍登録者の研究—』（雄松堂出版、2008）があり、前者pp.430-431、後者pp.174-5、218-20に、上田の名が載る。また、金子亨「Ueda Mannenのこと」（『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4、2001）は、本編のと同じ文書を含む資料を紹介しつつ、上田のドイツ留学について詳しく論じている。
- 7) 坪井次郎（1863-1903）は、後に京都帝大医学部教授（初代）・同学長。
- 8) 平山信（1867-1945）は、帝大星学科第1回卒業生、後に東京天文台長。なお、上掲『年報』によると、彼の留学先は「英国」だが、専らドイツで勉強している。注35参照。
- 9) この6年前に留学した森鷗外『航西日記』（『鷗外全集』35、岩波書店、1975）pp.75-83によると、1884年8月24日に横浜を発った彼は、10月7日マルセイユ着、パリを経て、11日にベルリンに到着している。
- 10) 『年譜』1882年の項に「〔卿太郎（りゅうたろう）〕ノ幼名ヲ「萬年」ニ更メラレシハ、蓋シコノ年コロニヤ、羅馬字ニテハUeda Mannenト自署セリ」（p.249）とある。新村がローマ字署名Mannenに言及するのは、本当はカズトシだと意識していたことによるだろうか。上田の孫となる富家素子も、「明治十五年〔…〕幼名を廃して、名乗りの万年を正式の名前として使うことにした〔…〕「かずとし」と読むのが本来の読み方だが、万年はローマ字で署名する場合、必ず「まんねん・うえだ」と書き、

「まんねん」と自分で決めていた」（『上田万年覚書』、『新潮』95-5、1998、p.217以下）と述べている。また、国語学会で発表した折りには、橋本研一氏から、父君（橋本進吉）に「万年筆」と同じに書いてカストシと読むと繰り返し教えられた、というコメントを頂いた。

- 11) 上田の最も早期の論文“A Vocabulary of the Most Ancient Words of the Japanese Language,” *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 16, 1889の著者名には“By B. H. Chamberlain, assisted by M. Ueda.”とある。前注の通り、『年譜』でもUedaを採る。なお、yeは、江戸期にはしばしば用いられた表記である。
- 12) UBの文書には、B1のように、ラテン語の表題や本文を取るものがある（B1の本文はドイツ語：後掲『講義目録』は本文もラテン語）。ULには、そのような文書は見られない。新興のUB（1810年創立）が古風なラテン語文書を残し、古参のUL（1409年創立）がドイツ語を採るという興味ある対照を示す。
- 13) 上田万年『国語学叢話』（博文館、1908）の「附録」として収められた箕作元八「独逸学生々活」に「他の大学から転学する事は、全国二十二個の大学の中から、熟れでも差支へはないが、外国のとなると、多少の区別がある […] 日本の帝国大学からだと、故障なく入学が許されるのだ。／さて、大学には、級など称するものは一つもない。何年居らうと、それは学生の任意である […] 試験を受けやうと思へば、何時でも善いのであるが、併し、入学から受験までの最短期の年限は予め定められて居る […] 各大学の転学は自由に許して居る。それで少くとも二個乃至三個の大学を経て、特にある学科に堪能な教授の講義を聴くのである」（p.207以下）とある。箕作元八（1862-1919）は1886～92年にドイツ留学、自らも幾つか大学を移っており、B2にも、上田と同じ1891年夏学期入学として、その名が見え、上田の留学当時の状況を伝える証言と言えよう。ただし、この「独逸学生々活」は、引用部分の後、学生組合と決闘の話題に終始し、自身や日本人留學生の生活ぶりを伝えていないのは残念である。
- 14) 岡田国太郎（1860-?）は、1886年帝国大学卒業、ドイツ留学の後は陸軍軍医学校教官等を務める。
- 15) B2ではYoshii, Itchizoと綴る。Rauck（前掲）、森川（前掲）共に伝未詳とする。一方、金子（前掲）は、UBLの別資料により、Ichito Yoschiiと読み、東大教授とするが、『東京大学百年史〔3〕資料Ⅱ』（東京大学、1985）に該当する者は見出せない。なお、里見弴の小説『極楽とんぼ』（1961年）に、同じ鹿児島出身の「吉井市蔵」なる人物が登場するが、1842年生まれとされており、この時期の留學生とは年齢的に合わない。
- 16) 日高真実（1864-1894）は、1886年帝国大学卒業（最初の教育学士）、88年に留学、92年に帰国して高等師範教授兼文科大学教授となるが、2年後に早逝。なお、上田（前掲）p.21に、「留学時代の上田氏及其友人」と題し、上田と日高に加え、岡田良平、清沢満之、沢柳政太郎、計5名の並ぶ写真（留学先で揃ったとは考え難く、日本での撮影か）が掲げてあり、彼等の交際が密であったことを窺わせる。
- 17) なお、金子（前掲）p.6は、UABは各学生の聴講科目を記載した「修学証書（Abgangszeugnis）」を保管するが、1891年度分の冊子には岡田・上田・吉井の3人分が「何故か欠落している」と述べている。
- 18) 山本（前掲）p.632が指摘するように、上田（前掲）p.20は、ガーベレンツを「始終の教導を仰いだ先生」といい、「三年間、学問上及び社交上の指導を仰いだ」と述べている。留学中に学んだ教授として名を挙げているのは、彼のみである。また、柴田（前掲）p.(2) は、上田の「言語学」講義（1896/97、1897/98）の「構成はガベレンツの*Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse*. Leipzig, 1891（引用者補注：川島淳夫訳『言語学—その課題、方法、及びこれまでの研究成果』（同学社、2009）が出た）に依存しているように見受けられた」とする。なお、田中克彦「ヒフミの倍加説」（同『国家語をこえて』、筑摩書房、1989）、同「言語学の日本的受容—ガーベレンツ、ソシュール、上田万年—」（『ライブラリ相関科学4 言語・国家、そして権力』、新世社、1997）は、同書がヒフミ倍加説に触れていることから、ガーベレンツが上田からヒフミ倍

加説を聞いたとするが、同書序文の日付は1891年2月であり、上田がUBに入学するよりも早い。もし、田中説が認められるのなら、ガーベレンツと上田との関係は上田のUB入学以前に遡れることになるが、それは相当に大胆な仮説である。

- 19) 新村は、『年譜』扉に、その原文を掲げる。古田（前掲）p.237, p.318参照。
- 20) W. von Humboldtの高弟として名高い言語学者だが、UBでは聖書学等も担当している。なお、高田博行「国語国字問題の中のドイツ語史—なぜドイツの言語事情が参照されたか—」（山下仁・渡辺学・高田博行（編著）『言語意識と社会—ドイツの視点・日本の視点—』、三元社、2011）は、上田の言語観に「留学中のシュタインタールの講義」が影響を与えていると指摘する（p.173以下）。既述の通り、上田がシュタインタールの講義を聴いた確証はないが、その学説の影響を受けたとする指摘じたいは頷けるものである。
- 21) ちなみに、森鷗外『独逸日記』（前掲書）p.88によると、1884年当時、森はベルリンからライプツヒまで列車で約3時間で着いている。また、上田（前掲）は、ガーベレンツに関する回想の中で「学校の休暇中の如きは、自分の居城である、アルテンブルグ在のボンユイツと云ふ処へ帰つて居るのであるが、その時には何時でも私を拉して行つて、賓客として、手厚い待遇を払つてくれた。これは、留学生として受け得た幸福中の幸福であつて、私の一生に於て、忘れることの出来ない愉快の一つである」（p.20）と述べている。アルテンブルグAltenburgは、ライプツヒから40kmほど南に位置し、ガーベレンツのSchloß〈城館〉は、同市の東北Poschwitz（「ボンユイツ」は「ボシユイツ」の誤植か）に現存する。外観は往時のままのようだが、内部にガーベレンツ所縁のものは残されておらず、一部を企業事務所利用しているのみである。あるいは、この年も、上田は、この館で夏休みを過ごしたのかも知れない。
- 22) 付言すれば、上田に10年余先立ち（1876-78）ULで学んだF. de Saussureの答えもNeinである。P. Villani “Documenti saussiriani conservati a Lipsia e a Berlino,” *Cahier Ferdinand de Saussure* 44, 1991, p.8 参照。
- 23) ドイツ語の綴りで、ueは、ほぼ_aue_か_eue_の位置に現れ、[_auə_]や[_ɔyə_]と読まれる。他に、queもあり、発音は[kve]か[kve:]となる。加えて、フランス語系の借用語にも見られ、その場合のueの発音は[y:]となる。一般のドイツ語で、Ueが語頭に立つ例は考え難いが、この伝で行くと、単にUedaと書けば、イーダとかオヤダとかに読まれかねないであろう。
- 24) なお、一部の講義名の前に書かれた*Auf Grund d[er] Quästurliste*〈会計台帳に基づき〉という語句は、他の学生のにも見られる。UALのJ. Blecher氏によれば、これは事務処理上の注記で、受講内容の差に関わるものではなく、本目録に掲げられた講義は、全て等しく、その学生が受講した証明であるという。
- 25) 以下、『講義一覧』『職員目録』所掲の綴りに従ったため、現代通行のとは異なる表記が散見されよう。
- 26) 同分野の科目群中には、Sprachwissenschaft（直訳すれば、正に「言語・学」）やPhonetikのように、近代言語学的な名称を持つものもある一方、文献学ないし文学研究的内容と思しきものも見受けられる。
- 27) 柴田（前掲）p.(3)は、「[Phonetics音韻学]の箇所では、ジーフェルスの*Grundzüge der Phonetik*. Leipzig, 1881（『音声学綱要』）をかなり忠実に祖述した部分があったり」と指摘している。上田がジーフェルスから大きな影響を受けたことは、間違いあるまい。
- 28) ラツツェルの主著*Anthropogeographie*（1886-91：由比濱省吾訳『人類地理学』（古今書院、2006））には「国家にとって土地が不可欠であることは疑問の余地がない」（訳書p.43）や「土地—これなくしては民族は存在しえない—」（同p.47）といった件が見られる。帰国直後の上田が行った講演「国語と国家と」（1894）の冒頭で、「国家」に不可欠の要素の第一に、「人種」や「言語」でなく、「土地」を挙げているところに、こうしたラツツェルの思想の影響を見ることもできよう。
- 29) 金子（前掲）は、「(L3に)記載されたのは、有料の講義だけで、少人数のゼミナール及び無料の私

的講義の分は含まれていないようである」(p.11)とするが、3-4で具体的に述べる通り、他の学生の中にはゼミ受講が「記載」されているものがある。また、金子は、ここから進んで、「(上田が)ゼミナールにどれほど出席していたかどうかについては、公式の記録がないので分からない」(p.15)とするが、他の学生に「公式の記録」が残っている以上、上田はゼミに出席しなかったと考えるべきである。

- 30) 表中、652番の学生は、1893年秋に修了後、直ぐに継続手続をして1893/94年冬学期にも在籍している。また、675番は、1888～89年に在籍し、1891年に再入学している。ここで扱ったのは、それらのうち、1891/92冬～93夏学期の受講分のみである。
- 31) 現イタリア共和国ボルツァーノ自治県内にある町。南チロルに属し、ドイツ系住民が多い。
- 32) この時期の『年報』では、以前のソシュール在任中と異なり、個々の「授業報告」に参加学生の一覧が示されていない。なお、ソシュールの「授業報告」については、清水康行「F・D・ソシュールのパリ高等研究学院における「授業報告」(1881～1889) 付. ソシュールの生家、終焉の地、墓所の案内」(『日本女子大学紀要 文学部』46、1997)を参照されたい。
- 33) 『東京大学百年史〔3〕資料二』(東京大学、1985) p.1154は、「被命」を1890年9月9日、「帰国」を1894年6月8日とする。ただし、根拠は明示されていない。Rauck(前掲) p.431は、これに基づくか、帰国日を「08.06.1894」としている。なお、出国は「1890」とするのみである。
- 34) <http://www.archiv.uni-leipzig.de/universitatsgeschichte/dokumentationen/japaner-in-leipzig/>。2011年9月21日閲覧。同ページには、編著者の名は無いが、“Tokyo - Leipzig - Tokyo. Die” Weltuniversität “Leipzig zwischen 1870 und 1909,” Dr. Jens Blecher, Direktor des Universitätsarchivs Leipzigという論文とリンクしており、現所長のJ. Blecher氏の手になるものであることが明らかにされている。
- 35) 平山(注8参照)は、既述の通り、上田と同期の文部省留学生。上田がULに去るのと入れ替わりに1891年冬学期からUBに在籍、上田の帰国後の1894年夏にULに移り、翌春に帰国する。藤岡勝二(1872-1935)は、東京帝大で上田に学んだ後、1901年に留学出発、ULには1902年夏～1903年冬に在籍、1905年に帰国し、上田の後を継いで言語学講座を担当する。なお、上田とも因縁のある森鷗外は、『独逸日記』(前掲) pp.88-114に、1884年10月から1年間、同地に在り、F. Hofmann(『職員目録』『講義一覧』により、UL医学部のProf. der experimentellen Hygiene〈実験衛生学教授〉として衛生学を講じていたことが確認できる)の下で衛生学を学んだ旨を記し、大学の様子も語るが、UALの記録中に彼の名は見つからない(当然、“Japaner in Leipzig”にも掲載されず)。学籍登録をしないまま通学する類だったかと思われる。